第12回ジャパンカップ

文 高橋源一郎　写真 久保吉輝

では、また、東京で

——1992年11月29日——

ダービーの時でさえ聞いたことのない大きな歓声だった。いや、ダービーの時とは種類の違う歓声だった。それはほとんど悲鳴に近かった。わたしは双眼鏡を強く握りしめたまま、馬場で何が起ころうとしているのかを見守っていた。ナチュラリズムがするすると先頭に立ったのが見えた。だが、すぐに、もう一頭ピンクの帽子が外からナチュラリズムに迫っていくのがわかった。トウカイテイオーだった。その瞬間、記者たちがいっせいに机を叩き、絶叫しはじめた。「岡部！　岡部！」わたしは息を呑み、その凄まじい競り合いを眺めていた。わたしに出来ることはそれだけだった。ゴールが近づいていた。「ああルドルフの子が」わたしは、確かにそんなことを叫んでいたようだった。

※

スタンドの一角で何やらひどく物憂げな顔つきをして、手元の新聞を覗きこんでいるのは『オーストレリアン』紙のジムだった。わたしが声をかけると、ジムはそっと振り向き、フレミントン競馬場でも見た柔和な笑顔を浮かべ、大きく両手をひろげて「ライター・ゲン！」と叫んだ。

メルボルンカップの翌日はオークス・デイだった。朝から外れっぱなしで、とうとう堪忍袋の緒が切れてしまったわたしは、成績表の載った新聞を破り捨て、可愛い名前や変な名前の馬の馬券ばかり買うことにした。その時からだった。どういうものか面白いように馬券が当たりだしたのである。1・7倍でオークスの不動の本命とされたラヴカムストウタウンが着外の惨敗。続いて、「世界最速のスプリンター」スキラッチが1・1倍の圧倒的本命で出てきたリンリスゴウS（GII）は、そのスキラッチが9頭立ての7着と謎の大惨敗。トリフェクタで3万倍が飛び出し1番人気が全て着外に消える惨状に、どよめく観客席で、わたしは着々と戦果をあげていった。7レース、わたしが買った8歳のせん馬ライター・ベンの単勝は29倍もつけた。

「よく、あんな馬が買えるもんだね」と、半ば呆れた調子で言われたわたしは、そっと、「いや、ぼくは日本では『ライター・ゲン』と呼ばれているのでね」とだけ答えたのだった。ジムは、そのことを覚えていたのである。

トウカイテイオー

わたしはジムと再会を祝し、そして世界中のどこの競馬場でも、出会った競馬ファンがするような話をした。

——ライター・ゲン、『ブラッド・ホース』誌は読んだかい？　今年はJCの日本馬は弱いって書いてあったろう。

——もちろん、読んだよ。それを書いたのは誰だか知らないが、ぜんぜんわかっちゃいないね。回避したミホノブルボンはすごく強いしトウカイテイオーも調子さえ戻っていれば、相当なもんだよ。

——ライター・ゲン、それはともかく、7レースのウエルカムSのエイシンテネシーとダイイチジョイフルはどっちが強いのかね。日本ではリットーに所属している馬の方が強いそうだが。

——よく知ってるなあ。強いていうならダイイチジョイフルかもしれないな。彼を管理しているイトウ調教師は、オーストラリアでいうならカミングス調教師みたいな人だよ。もうずいぶん昔から、GIをとりつづけてきた、ビッグ・ネイムさ。

——そりゃあ、たいしたもんだ。

——もう一つ、つけくわえておくとだね、JCに出てくるレガシーワールドのトヤマ調教師はフリードマンみたいな人だよ。チャレンジ精神があり、猛烈な調教をして馬を変身させることに興味があり、おまけに、思っていることを正直に言う調教師さ。

——グッド！　ライター・ゲン、じゃあ、このJCは我々のレッツイロープ、ナチュラリズムとそのミスター・トヤマの馬の争いだな。

わたしはジムに、レッツイロープは去年、連勝して

H.Matsuzaki

Y.Murugishi

F.Nakao

H.Watanabe

いた時に比べてだいぶ肥っているように見えるけど、と言った。

——そうそう。きみも知ってるとおり、マッキノンSもメルボルンCも雨で出られなかったからね。カミングスも焦ってるだろう。それに比べて、ナチュラリズムはパーフェクトに仕上がったよ。フレミントンで調教レコードを出したのは聞いただろ？　フリードマンは壊れる寸前までやるからなあ。

——ぼくもナチュラリズムだと思ってた。この世代はもしかして、この十年のオセアニアでいちばん強いんじゃないかい？

——ああ、そうさ。ナチュラリズムはボーザムやボーンクラッシャー級の馬になりつつある。フリードマンはここを勝ちカミングスに代わって「キング」の称号を手に入れるつもりなのさ。

この日わたしは、ジムをはじめ、何人もの外国人記者やら牧場主やらと再会した。中には素姓を知らぬまま顔見知りになった人間もいた。もっとつけ加えるなら、やはり素姓をよく知らないまま、エプソムやロンシャンで初めて知り合いになった日本人たちとも再会したのだった。彼らの多くは、ふつうの競馬ファンに過ぎなかった。つまり、それは「熱狂的な競馬ファン」と言いかえても同じことだった。

六月の第一水曜日、エプソムの過酷なコースに耐え、ゴール直前の「心臓破りの丘」を力強く駆け上がってくるドクターデヴィアスの姿に、わたしと一緒に「アンビリーヴァブル！」と叫んだイギリスの記者がユーコーハイレディの単勝馬券をわたしに見せて、悔しそうな顔をした。

——なんだい、このカーリーアンの産駒はちっともカーリーアンらしくないぜ。

——きみの血統馬券もあいかわらず外れてばかりだなあ。

——ああ、ドクターデヴィアスのことを言ってるのかい。あれにはまいったねえ。ダービー史上最大の珍事って知ってるかい。やっぱり、今年と同じでね、スプリンターのハードソースの子ハードリドンが勝ったことだったんだ。そういえば、ハードリドンは日本に行ったんだったな。

——イギリスの新聞は全部、ドクターデヴィアスはスプリンターだから駄目だって書いてたね。『レーシング・ポスト』のポール・ヘイの「最終診断」読んだ？「ダービーを理解している人間で、この馬に賭ける者はいない」ってさ。

——調教師のチャプルハイアムだって、勝つのは困難だろう、っていってたんだぜ。記者がそう思うのも無理はないって！　きみ、競馬に絶対はありません！　ところで、JCは何を買うんだい？　もちろん、クエストフォーフェイムだろ？　あの馬はアメリカへ行ってから変身したからな。JCでは買いだよ！

——史上最弱のダービー馬だって言ったのはきみじゃなかったっけ？

そして、JCのパドック。ゆっくりと馬たちが入ってくる。4階のベランダから身を乗り出し、双眼鏡を覗いていたわたしの肩を誰かがそっと叩いた。わたしは双眼鏡をおろし、後ろを振り向いた。淡黄色の花柄のスーツを着た女性が、眩しそうにわたしの顔を見つめていた。

——あの。覚えてらっしゃいますか？

——ああ、もちろん！

わたしは名前を言おうとして、彼女の名前を聞いていなかったことを思いだした。しかし、あのような状況の下では仕方のないことだったのだ。

十一月三日。チガ・ウィークエンド初日、凱旋門賞を明日に控えたこの日の華は、3歳No.1を決めるグラン・クリテリウムであり、それから最強のステイヤーを決めるカドラン賞であり、アルナスルアルワシークやシレリーやザーヒの出るドラール賞だった。ドラール賞が終わり、降り続く雨の中、ただでさえ少ない観客の数が目立って減りはじめた頃、6レースのGIIIリュテス賞がはじまるのをわたしは心待ちにしていた。そう、ジャムシードが出るからだ。

チガ・ウィークエンドの二日間にエントリーしているサラブレッドは168頭。アメリカ産馬が半分を占め、残りをイギリス、フランス、アイルランドが分け合う。その他にはカナダ産馬が一頭、スペイン産馬が一頭、そして日本産馬が一頭いるだけである。それがジャムシードだった。

どんよりと暗い空から絶え間なく雨が降り、強い風といっしょになって吹きつけていた。馬場は泥田のようだった。わたしは柵にしがみつき、入場してくるジャムシードに視線を送った。フランス・ダービー以来、半年ぶりに見るジャムシードは相変わらず華奢に見えた。静かに、おとなしく首を垂れたまま、ゆっくりと脚を進めるごとに、球節のあたりまでずぶりとめりこんでいくのがわかった。

——これじゃあ、ダメだなあ。

わたしは呻くように呟いた。小柄で切れ味で勝負するタイプのジャムシードにはまったく合わない馬場になっていたからだ。しかし……。

一団となって直線へ入ってきた馬群の中から、力強くジャムシードが伸びてくるのが見えた。そう思った時には、もうわたしは走りだしていた。馬道からゴールポストに向かって、ロンシャン競馬場の埒沿いに、スーツにネクタイの上からレインコートをはおりおまけに肩からショルダーバッグ、首から双眼鏡を下げた

ユーザーフレンドリー
ドクターデヴィアス
クエストフォーフェイム
ディアドクター
ヴェールタマンド
レッツイローブ
ナチュラリズム

ままで、わたしは「ジャムシード！」と連呼しながら走った。走るわたしのすぐ横を泥だらけになりながらそのジャムシードが駆け抜けていった。走っているのはわたしだけではなかった。どこから現れたのか、あちらでも、こちらでも、日本人ばかりがみんな素っ頓狂な声を上げ、両手を振り回し、水たまりに足を突っ込みながらやはり走っているのだった。わたしはよろよろになってゴール近くまでたどりついた。ズボンも靴もびしょ濡れだった。ジャムシードは2着だったが、わたしは深く満足していた。わたしは柵にもたれ、息をはずませながら、戻ってくるジャムシードを待った。その時だった。彼女が話しかけてきたのは。

——タカハシさんですか？

——ええ。

——タカハシさん、走ってらしたでしょ。わたしも走っちゃいました。ああ、すごいわ。だって、ルドルフの子なんですもの！

そして、ジャムシードが戻ってきた。場内のあちこちでぱらぱらと拍手が起こった。数は少なかったが、心のこもった拍手だった。記者席に戻ると、見知らぬフランス人記者が手を差しだし、英語で「惜しかったね。健闘だった」とねぎらってくれた。それが合図であったかのように、何人もの見知らぬフランス人やイギリス人やイタリア人がわたしを取り囲んだ。

——勝ちにいったからね、いちばん強いレースをしたよ。

——アセッサーを問題にしなかったのはすごいね、たいしたもんだ。

——ムッシュー、彼の父親のシンボリルドルフっていうのはどんな馬なんだい。

だから、わたしは覚束ぬ英語で、シンボリルドルフはとてもとても強かった、そしていま日本にはルドルフの子であのジャムシードよりずっと強い馬が一頭います、と何度も馬鹿みたいに繰り返してしゃべったのだった。その瞬間までは他人だった。けれども、もうわたしたちは他人ではなかった。ルドルフの子がロンシャンを2着で走った。見えない壁を乗り超えるには、それだけで充分だったのである。

わたしと彼女はしばらく黙ってパドックを見下ろしていた。

——凱旋門賞は何を買われました？

——マジックナイトを買いました。最後までシュボテイカとどちらを本命にしようか迷ったんですけどね。マジックナイトは完璧に見えたんだけどなあ。それとジョリファ。馬場がよかったら、いまでも勝ったのはジョリファだったと思います。フランスの新聞にはことしの凱旋門賞はレベルが低かったと書いてありました。ぼくもそう思います。スワーヴダンサーもピストレブルーも出ていなかったし、ジョリファやセントジョヴァイトには馬場が悪すぎた。

——わたしはユーザーフレンドリーを買いました。あの負けん気が大好きだったから。タカハシさん、今日は？

——ナチュラリズムです。この馬も比類なき根性の持ち主ですよ。あなたは？

——もちろん、ルドルフの子！

本馬場への入場がはじまり、わたしたちはパドックを離れた。彼女はわたしに言った。

——では、また。

記者席へ戻りかけた時だった。めまいのようなものを感じ、わたしは立ち止まった。しかし、それはめまいではなかった。「では、また」という言葉が、わたしの頭の中で鳴りひびいていた。それはいったん、わたしの深いところに落ち、また吹き上がってきた。「では、また」そう、わたしは、この言葉を、今年何度も繰り返し聞き、そして自分でも使ったのだった。記憶は褪せることなく、いまも鮮明だった。ダービーの興奮冷めやらぬエプソム競馬場の、新装なったクイーンスタンドのエレベーターに乗りこんだ時、帰りがけの記者の誰かが、わたしに「では、また、東京で」と言ったのだった。強くなりはじめた雨の中、新聞を頭にかざし、タッテナムコーナー・ステーションに向かって走っているわたしたちに向かって、悠然と雨に濡れながら歩いていた初老のジェントルマンが「そこのジャパニーズ、また、東京で」と叫んでいた。シャンティのみすぼらしい木造スタンドの硬い席で、ゴールを駆け抜けても止まらずそのまま坂を駆け上がって地平線の向こうまで走っていってしまうニューマーケットのコースの片隅で、フレミントン競馬場からメルボルンへ戻るリバー・クルーズの船の上で、わたしはまた「では、また、東京で」を聞き、わたしもまた「では、また、東京で」と繰り返し答えたのだった

わたしは一介の競馬ファンにすぎない。わたしは何にも邪魔されぬ自分だけの楽しみとして競馬場を訪れる。それは国内であろうが、国外であろうが、同じことだ。そして、時々、その楽しみは、競馬を見る喜びは何だろうと考えるのである。今年もまた、わたしは通帳の残高を気にしつつ、競馬場を訪れる旅に出た。柵の向こうには溢れるばかりの緑があり、鍛えられた名馬たちがいた。わたしはいつも、柵にしがみつき、憧憬の眼差しを送るばかりだった。だが、それは孤独な旅ではなかったような気がするのだ。

わたしたちが旅をするように、柵の向こうで、馬たちも旅をしていた。それは、わたしたちより遥かに過酷な旅に違いなかった。レースからレースへ、競馬場から競馬場へ、大陸から別の大陸へ。彼らの旅は勝ち抜くための旅だった。シーズンの終わりと共に、旅も終わる。柵の向こうでは「では、また」という挨拶が

H.Watanabe

交わされ、馬たちは、それぞれの休息の場所へ戻ってゆく。それは柵のこちらでも同じことだ。ファンたちもまた「では、また」という言葉と共に、家へ帰るのである。

わたしはいつも、そこで少し寂しい思いをしていた。その「では、また」を、わたしたち日本人はいうことができなかったから。わたしたちは、いつもゲストであり、旅人にすぎなかったのである。

※

レースは終わったが、昂揚した気分はまだ続いていた。わたしは観戦記を書くための原稿用紙を広げ、ぼんやりと、ついさっきまでトウカイテイオーやナチュラリズムやディアドクターが激しく競り合ったターフを眺めていた。素晴らしいプレゼントをもらった時のように、わたしは満ち足りていた。あんなレースを見た後で、書くことなど何もなかったのだ。遠くの席から、誰かが手を振っていた。『オーストレリアン』のジムだ。

――ライター・ゲン、最高、最高！ 最高のレースだったぞ！ ナチュラリズムは凱旋門賞へ行くってさ！ もちろん、トウカイテイオーも来るだろ？ そして、ヨーロッパの連中に一泡ふかせてやろうじゃないか！ では、また、フレミントンで。いや、ロンシャンで！ わたしは、立ち上がり、ジムに最敬礼した。

――では、また、ロンシャンで！

そして長い旅は終わる。馬も人も、故郷へ戻ってゆく。「では、また」

サラブレッドのチャンピオンたちが歩むロード・マップにようやく「東京」という言葉が印される。それは、短く、冷たい単語に過ぎないが、同時にそれ以上

岡部幸雄騎手

H.Matsuzaki

松元省一調教師

Y.Muragishi

内村正則オーナー

のものでもある。競馬場で話される言葉は一つしかない。それをわたしたちは競馬語と呼んでいる。それは政治の言葉のように、表と裏でできているのではなく、経済の言葉のように素っ気ないものでもない。それはたくさんの豊かな感情と無数の経験と事実に支えられた、だが単純な言葉だ。新しい年がくれば、わたしはまた、小さな鞄に荷物を詰めて、飛行機に乗るだろう。そして、はじめての競馬場でも、まるで熟知した場所であるかのように訪れるだろう。「どこから来たのかね？」と訊ねられたら、わたしはようやく使えるようになった競馬語で「東京から」と答えよう。あるいは、競馬語をいくつか重ねて、「シンボリルドルフの子トウカイテイオーがJCで勝った東京から」と言おう。すると、競馬の国の住人であるその人はたぶん「ああ、去年、ユーザーフレンドリーが体調を悪くして負けたんだっけ」と、あるいは「ナチュラリズムは惜しいことをしたよ」と言うだろう。わたしたちは芝生に座りこみ、いつまでも、どちらの国のチャンピオンが強いか話をして飽きないだろう。そして、気がつけばレースはすべて終わっていて、わたしたちはのろのろと立ち上がり、ズボンの尻についたゴミを手で払い、「では、また」と言い合うだろう。その時、わたしは、そうやって旅に出る必要さえなかったことに気づくだろう。

「わたしはね、一度も国を離れたことはないけど、世界中の競馬場を知ってるよ。だって、馬たちが代わりに行ってくれるんだものね」それは柵のこちらから、永遠の憧れをもって馬たちを眺めることしかできない競馬ファンの特権だ。旅する馬たち、それはわたしたち自身の姿なのである。

では、また、友よ。今度はエプソムで、あるいはロンシャンで。また、1993年の東京で。

H.Watanabe